

二〇二〇年度 前期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】 説明的文章(論説、実学的文章)

【出典】

『中学生からの数学「超」入門』

数学に苦手意識をもっている人の多くは中学生の時点で挫折しているようだ。加えて、算数さえわかっていれば大人になって困らないという意見もまだまだ根強い。確かに、算数から数学に変わると、一気に難しくなるように感じるが、中学数学には公式の丸暗記では鍛えられない要素がたくさんある。さらに、学校とは違った、図形、数と式、関数、資料の活用という順番で数学史をもとに読み進めると、数学的に考える術を学ぶことが可能となることを分かりやすく説明した著作

著者 永野 裕之

一九七四年東京生まれ。東京大学理学部地球惑星物理学科卒。同大学院宇宙科学研究所(現「ISAS」)中退。高校時代には数学オリンピックに出場した経験も持つ。現在、個別指導塾・永野数学塾の塾長を務める。大人にも開放された数学塾として各種メディアに取り上げられている。

問一 漢字の読み書き

漢字を学習するためには、音訓の読み方を習得し、漢字一字一字の意味を理解する必要がある。漢字本来の原義を理解した上で学習することで、場面に合った漢字を用いることができるようになる。漢字の習得を通じて、語彙力を高めよう。

高校生になると、評論文・小説など読解力が試される分野も多くなるため、中学生の間も、これからも語彙は増やし続けよう。

問二 接続語の問題

X は長い一文の途中、X をはさんで前後の関係を問うている。直前の内容は、『なぜ、私はこのように考えるのか?』を筋道立てて説明し、自分とは違う意見に対して「なるほど、あなたの意見も一理ある」と納得できること、とある。後半の内容は、論理的であることが求められること、とある。前半の筋道を立てて説明(納得)できる内容と、後半が論理的である、との内容のつながりを考えると、換言(言い換え)の「すなわち」が適切となる。

Y は前後の文の関係を問うている。直前の一文が、現代に生きる私たちは未知の問題を解くための力を培うことが求められているという内容。Y を含む後半の一文が、公式を暗記してあてはめるだけでは、既出の問題しか解けなくなるという内容となっているため、対比関係だと分かり、逆接の「しかし」が適切。

学習者は接続語のような、そもそも論理(つながり)を明示する語の有無に関わらず、常に語と語、文と文の関係を意識(考え)ながら読む技術・態度が重要である。また、例えば「即ち(すなわち)」のように普段用いない言葉ならば、なおさら言葉の意味の確認、定着をはかりたい。

問三 1 口語文法 2 因果 3 対比

1 は長い一文を読み、理解するにあたり、主語と述語を意識して読む技術と態度が備わっているかを確認している。初めに意識してほしい部分は、一文の結論を示す述語であるが、倒置等の修辞が用いられない限り、文末に存在するため、条件の一文節を意識して「進化しました」と考える。やや長い一文節の述語であるが、なぜ短く区切ることができないのか、単語の理解も確認しながら考えてみてほしい。次に主語であるが、述語と主語の関係は同義(イコール)の関係になる。よって「進化した」ものは何かといえは、述語の近くからさかのぼって考えていけば「数学」であることが分かり、一文節の条件に注意して「数学は」と解答できる。ややもすると適当に読んでしまいそうな日本語文であるが、まずは語、次に語と語のつながりをもって、論理的かつ客観的に一文を読み解釈していきたい。

2 は傍線部の内容、「タレスが数学を計算・技術から論理によって言葉∥道具に進化させた」背景を問うている。背景ということは、タレスが傍線部のようにした理由(原因)を問われていることに気づけるかどうかのポイントである。直前の段落で、タレスが古代ギリシャの人物であることが述べられている。このつながり(同義)の理解を基に、二段落あとの古代ギリシャの社会について説明された内容を理解し、古代ギリシャ社会の中で生きたタレスが数学を進化させた背景が

分かるはずだ。最後は解答条件(字数等)に注意したい。

3 は2とは対照的な社会についての理解を問うている。2が分かれば明白で、民主制をとる古代ギリシャに対し、王朝国家である(古代)エジプトについての説明を理解していく。ここでも同義関係を意識し、条件に注意して解答してほしい。

問四 1 追加資料による部分解釈

2 表現とつながる内容理解

3 図式化された内容に対する考察

1 は筆者が本文中で論理を「言葉∥道具」としている箇所の解釈につながるものである。人間は言葉によって論理的に思考することができるよう以前に、言葉があつて初めて世界を認識(識別)することができ、逆もまた然りである。この関係を受験生が理解できていれば解答はやさしいわけだが、そうでない場合は【追加資料】を本文と同じ技術・態度にて読解参照して解答していきたい。

2 は「数学」の変化に対し、筆者がどのような表現でどのような意味づけをしようとしているのかを考える。現在でも市井では、一般的に数学は単なる計算や技術程度のもつと考える人も少なくはないだろう。しかし、本文中でも、本問の趣旨としても、「世界の真理」を探究する糸口となるのが数学と考えることもできる。

3 は本文の内容に対し考察する、ここでは類推して対比する思考力を問うている。民主的社会においては互いに「なぜ

このように考えるのか」を筋道立てて説明し、論理によって「その考えも一理ある」と認めあうことができる。勿論、現実では対立することもあるかもしれないが、粘り強く論理的な「対話」を続けていけば、お互いの主張（権利）が護られ、対等な関係を育むことも可能だろう。逆に右のプロセスのない、絶対的な権力者（？）の下で生きる際には、権力者の価値観がモラルとなるため、最終的には右とは逆の社会になってしまう可能性がある。勿論、儒教の考え方でいう、権力者が「徳」のある「聖人」であれば別だろうが。

問五 1 熟語の成立と漢和辞典の引き方

2 演繹的思考の具体化

1の解答にあつては、まず本文中より演繹の意味(定義)を確認して、熟語中の「演」と合致しているものを考える。「演芸」「演習」「熱演」の「演」は全て「実際に行くこと」、講演の「演」は「話題を広く述べる」の意味である。話をつなげて広げていくという意味、他の選択肢との関係から適切なものを考えたい。演繹の意味と「演」の意味のつながりから考え、部首は「糸」だと分かるため、糸を除く残りの画数から「繹」の意味が特定できる。2は演繹の定義に沿って具体化ができる力を問うている。ウだけは、二つの前提条件が一般的(法則)ではなく、結果も当然の帰結とはならない。推論も誤りであるが、この具体例は「帰納的」推論である。

問六 本文構成と資料を用いる意図

文章2では主に数学の学習により演繹的思考を身につけるメリットについて述べられている。しかし途中で演繹的思考の「楽さ」故に考える機会を奪うというデメリットも提示している。ここで最後の内容を見ると、数学の望ましい学び方を提示していることと、文章1とのつながりを考えると、筆者は数学を学ぶ意義について自分の意見を補強しながら、反対意見を想定したうえで結論を導いていることが分かる。

問七 プレゼンテーション(話す)構成

よりよく「話す」際には、内容に応じた構成や展開をよく考える必要がある。考えてみてほしいのだが、この設問に取り組む際には、まず読解・解釈する「読む」行為、次に話す内容を「考える」、メモを「書く」力が必要になる。この一連の流れに沿って問七まで解答を進めてくれば、よく「話す」ことができるはずだ。

問八 1 考察と資料の作成

2 話し合いの内容・技術・態度

1はここまでの内容を踏まえて、対比的に推論を進める必要がある。また、具体と一般の関係を踏まえながら、空欄の内容を創造的に考えていく必要がある。帰納的な学習例としては、一つ一つの語をもとに、つながり(文法)などを意識しながら一般的な解釈を目指す過程をとる国語や英語の文章読解が当てはまるだろう。

知和さんの発言は、ネガティブな意の批判ではなく、発表がよりよくなるための提案と、発表者の意図が明確でなかった点を明らかにし、自他の理解や考えを深めようとする質問をしている。

【二】 文学的文章（説話、小説）

文章1〈出典〉『今昔物語集』

平安時代後期に成立した日本最大の説話集。収録されている千余話すべて「今ハ昔」と書き起こされる。天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）仏教説話、本朝（日本）世俗説話の四部に分けられる。

文章2〈出典〉『鼻』

作者、芥川龍之介の文壇デビュー作。『今昔物語集』を題材にしながら、「利己的な人間の本性」を描いた短編小説。

問一 古典文法（歴史的仮名遣い）

仮名遣いにはいくつかのルールがある。
①語頭以外の「はひふへほ」は「わいうえお」に直す。②ワ行の「ゐ」は「い」、「ゑ」は「え」に直す。このことから「むかひゐて」の「ひ」と「ゐ」を現代仮名遣いに直して解答する。

問二 文章読解問題（主語の判別）

傍線部②「去りぬ」を含む一文は、『内供の食事の際「弟子の法師」が、板を鼻の下にいれて、向かいにいて、上に持ち上げて、食べるときにいて、食べ終わった

ら降ろして、去る。』とある。読点が多いので、「」前後の主語を確認しながら読み進めよう。傍線部③「物も食はずなりぬ」の直前には「むつかりて」（機嫌が悪くなつて）とあり、「他の人が食事の際鼻を持ち上げると機嫌が悪くなり食べなくなる」という意になる。鼻を持ち上げられる人、食事をしている人は誰なのか、前後の文から読み取ろう。

問三 文章読解問題（心情の把握）

冒頭より「物食ひ粥などを食ふ時には」と内供の食事をする際の様子の説明されている。傍線部④「いかがせむとする」とは「どのようにしようか」という意味になるが、その直前に「鼻を持ち上げる人（弟子の法師）がいないので」と困っている理由が説明されている。以上のことから解答を導くことができる。

問四 文章読解問題（人物の関係把握）

傍線部⑤に含まれる「召す」とは「お呼びになる」などの尊敬語である。困っていた法師は「私も鼻を持ち上げるのが上手だ」と言っている弟子がいることを知り「その者をここへ呼びなさい」と言っている場面である。

問五 1 古典文法（係結びの法則）

2 文章読解問題（因果関係）

1の係助詞「ぞ・なむ・や・こそ」などが文中に用いられている場合、文末の結びの語が連体形や已然形に変化する。このような文の法則を「係り結びの法則」

という。「ぞ・なむ・や・か」の場合、文末は「連体形」となり、「こそ」の場合、文末は「已然形」となる。

2は弟子どもが「笑った理由」は、直前に「これを聞きて」とある。さらに前の会話部分に注目すると、くしゃみをした童が「世の中にそんな鼻をした人がいるなら、他でも持ち上げることがあるでしょうが（そんな鼻の人はいない）」と内供の発言に対して内供へ反論している。以上の内容を含むアが正解。イ、ウ、エについては童の発言が本文の内容と異なる。

問六 表現技法の問題（比喩法）

「比喩法」は物事を直接表現せずに、たとえを用いて理解を容易にする表現技法であるが、「直喩」「隱喩」「擬人法」などに分かれる。今回の傍線部箇所では「くような」と「鼻」を「腸詰」と表現している。このように「くような」や「ようだ」などを用いて例える技法は「直喩法」に分類される。

問七 文章読解問題（対比関係の理解）

傍線部⑧の直後には、「もちろん表面では…」とあるように、表面では「気にしていない」が内心では「気にしている」という関係が描かれている。また、「鼻」に対する内供の悩みは、実際の不便（食事など）だけではなく、自らの容姿に関する「自尊心（プライド）」もあると述べられている。以上の内容を踏まえて字数に合わせて解答する。

問八 文章読解問題（因果関係）

ここでの「俗」とは「一般の人」という意味になる。つまり傍線部⑨の内容は「僧である事が幸せ」という意味だと考えられる。「幸せ」な理由としては、直後に「あの鼻では…」と妻を持つことはできないだろう、と言っている。僧になることで妻を持たない原因は、「鼻」ではなく「僧」という仕事をしているからとなるので、「幸せだ」と世間は言っている。

問九 語句の問題（対義語）

積極的とは物事を進んでする様子を表す言葉。その対になるので「すすんでしない、引っ込んでしまう様子」を表す言葉が入る。

問十 文学史問題（小説家）

芥川龍之介は大正時代の小説家。様々な歴史的文献を題材に短編小説の作品を描いた。没後、親友である菊池寛により「芥川龍之介賞」が設けられた。本文も『今昔物語集』を題材としている。

問十一 全体の内容理解

生徒Aの発言通り**文章1**でも**文章2**でも、「内供の食事の様子」が本文中に引用されている。さらに設問では、生徒Bの発言によって文章の終わり方について注目し、**文章2**での内供の心情部分について話題となっている。本文中にも長い鼻によって「自尊心が傷つけられた」と表現されているところがあり、生徒Cの意見は適当である。しかし、生徒Dの発

言に「登場人物の関係性」や「人の身分や立場による社会的な優劣」というのがあるが、本文中から右のことについて読み取ることはできないので誤りとなる。

文章1「現代語訳」

粥など、物を食べるときには、弟子の法師に長さ一尺、幅一寸ほどの平らな板を持たせ、鼻の下に差し入れて、向かいに座り、内供が食事を終えるまで鼻を持ち上げていて、食べ終わるとそれを下げて去る。たまに違う者にこの役割を命じると、うまくできないので、機嫌も悪くなり何も食べない。なので、この法師だと決められて持ち上げていた。

ところが、この法師が身体を悪くしてこの役目ができなくなった。鼻を持ち上げる人がないため、内供は朝食を召し上がることもできない。どうしたものかと困っていると、ある童が申し上げた。「鼻なら私にも持ち上げることができます。平素これをしている法師には劣りません」これを別の法師が聞いて内供に伝えた。この童は見た目もよかったです、召し上げられることも多かったです。「その童をつれてきなさい。そこまで言うなら、持ち上げてもらおう」と言ったので童は召された。

童は鼻を持ち上げる板をもって、適当な高さを持ちあげた。粥をすすりながら内供が言上。「この童ははたいへん上手だ。いつもやっている法師よりもうまくやっている」といって、内供が粥をすすっていると、童は鼻がむずむずしはじめ、大

きなくしゃみをした。このとき、鼻を持ち上げている板が大きく動いたので、鼻を粥の鉢に入れてしまった。内供の顔にも童の顔にも粥がかかった。

内供は大いに怒り、紙で顔にかかった粥をぬぐいながら言った。「おまえはまったく心ない愚か者だ。私ではなく、位の高い人の御鼻を持ち上げていたらどうするのだ。痴れ者め。出て行け！」といい童は追い立てられ、隠れて言った。「世に内供のような鼻をしている人があるものか。鼻を持ち上げる機会なんか絶対はない。おかしなことを言うものだ」これを聞いた弟子たちは、外に出て大笑いした。

【三】 古典（漢詩）

漢詩〈出典〉『春望』

作者、杜甫。長安の荒廃した様子をうたう。詩の前半は、変化する世の中と、変わらない自然とを対比させている。また、後半は国を憂い家族を思い、心労によって急激に衰えた身を嘆き結ばれる。

文章〈出典〉『声に出して読みたい日本語』

筆者、齋藤孝。口上や早口言葉、古典の名句など様々な文章を、「目で読む」のではなく「声に出して読む」ための暗誦テキスト。各文章には著者の体験や解説も述べられる。

問一 漢文構造の問題（書き下し文）

漢文を書き下すとき、「訓点」に注意したい。漢文の語順を日本語の語順に直す

必要があるため、これを示す記号の「返り点」に従うこと。カタカナで書かれた「送り仮名」を平仮名に改めて書くことや、「句読点」も忘れてはいけない。

問二 漢文構造の問題（対句形式）

漢詩には、律詩の三句めと四句め、五句めと六句めが対句になりやすいという規則がある。**文章**にもあるようにこの漢詩では第一句と第二句、第三句と第四句、第五句と第六句が「対句」である。つまり傍線部①「感時花濺淚」の対になるのが**X**を含む句である。返り点、文の構造が同じであり、意味や品詞のうえで**X**と対になるのは「花」である。

問三 知識問題（語句）

漢文では単語の①読み、②意味の二つを意識して学習しよう。「欲」は漢文では「よく」（欲望）か「ほっす」（くしようとする・くしそうだ）等がある。

問四 漢詩の形式に対する問題（押韻）

漢詩の押韻は原則として五言の場合「偶数句末」となる。深（シン）心（シン）金（キン）簪（シン）と押韻されている。

問五 知識問題（漢詩の詩人と作品）

杜甫とは中国盛唐の詩人である。李白と並ぶ中国文学史上最高の詩人として、李白の「詩仙」に対して、「詩聖」と呼ばれている。また**漢詩**の作品名は杜甫の代表作である『春望』である。

問六 読解問題（漢詩の内容）

この漢詩の背景として、**文章**であるように杜甫は捕虜となり、家族は地方に疎開していた。また、**漢詩**中にある「家書」とは「家族からの手紙」のこと、「万金」とは「黄金」のこと、「抵」は「値する」の意味である。家族の安否を知ることにも難しい状況で「家族からの知らせ」は大変貴重なものとなった。

問七 文学史問題

『春望』は日本文学にも影響を与え、俳人松尾芭蕉の『奥の細道』にも「国破れて山河在り」と引用されている。（C）の後に書かれている「夏草や…」は松尾芭蕉の俳句である。

問八 漢詩の形式に対する問題

漢詩の形式は、一句に五つの漢字が使用される「五言」と七つの漢字が使用される「七言」がある。また、四句からなる詩を「絶句」、八句からなる詩を「律詩」という。

問九 読解問題（内容の把握）

『春望』の第一句「国破」は戦争によって荒れ果てた激動の世の中を表現し、「山河」「草木」などはそこに残された変わらぬ自然を表現している。詩の後半部分は「烽火」（戦火）が三か月も続くことや、「家族からの手紙が貴重である」などの、作者の不安や家族への思い、国を憂う気持ちが表示されている。これらのことから「ア・オ」が適当。イの首聯（第一句）

第二句)と尾聯(第七句・第八句)は対句になっていないので誤り。ウ・エともに「戦争に勝ち続ける」や「亡くなった家族」など詩からは読み取れない内容があるので誤り。

〔現代語訳〕

都は戦乱のために破壊されてしまったが、自然の山や河は昔どおりに残っている。この城内は春になっても、草木が深く生い茂っているのみで、人陰すら見えない。自分はこのいたましい時世に感じて、平和な春ならば花を見て楽しいはずなのに、かえって花を見ては涙をはらはらと流してしまう。家族との別れを恨み悲しんで、心を慰むべきはずの鳥にも心を驚かされる。戦火は三ヶ月もの長い間続き、家族からの手紙もなかなか来ないので、万金にも相当するほど貴重に思われる。自分の白髪頭をかくと、髪の毛も短くなってしまい、役人が頭につける冠をとめるかんざしも挿せないほどになってしまった。